

今回で自身三度目の秋田訪問であった。

秋田県藤里町は秋田県の中でも群を抜いて高齢化率が高く、4割を超えている。更に冬季には雪が一面を覆う豪雪地帯であり、若い人手がない地域では除雪作業に手こずってしまうことが多い。その為、独居高齢者世帯や体の不自由な方が住んでいる世帯などは、役場や社会福祉協議会の協力を得て除雪をしてもらわざるを得ない状況が続く。

我々の活動はそのような独居高齢者のお宅を訪問し、交流活動を図りながら、除雪のボランティアを行うことがメインとなっている。地域の高齢者と交流を図り、藤里町ならではの名物や方言、暮らしぶりを教えてもらえる貴重な機会でもある。東京の学生と秋田の山奥の高齢者という対照的な存在ではあるが、自分が3年間関係を気付いてきた方とは文通をするほどにもなった。

今回は、今まで活動をしてきて、お世話になってきた社会福祉協議会の職員の方々やお宅を訪問させて頂いた地域住民の方々への恩返しの意味も込めての活動である。

1年目の訪問では、藤里町社会福祉協議会のお世話になり、高齢者のグループホームやデイサービス、生活支援ハウスなどを訪問させて頂いた。高齢者に対する傾聴がメインであり、秋田と東京を結ぶ交流活動を行った。同時に、社会福祉協議会の方に、同市の福祉政策や活動内容を説明して頂いた。それは、当時大学1年生で社会福祉に触れてまだ浅かった自分にとって非常に勉強になり大きな刺激にもなった。また同時に、藤里町だけでなく、自分の住んでいる地域などの社会福祉協議会やその他相談援助機関がどのような活動をしているのかに非常に興味をもつきっかけとなった。

自分が2年生になり、専門ゼミではどのようにすれば高齢者がもっと豊かに生活できるのだろうかというテーマで研究を続けてきた。藤里町には自分が理想と考える人の生活が営まれていることに魅力を感じている。住民、特に独居高齢者にとって社協や福祉相談所のようなところは敷居が高く、自ら進んで訪れようとはしない場所であると思う。高齢者となると体が不自由になり外出も出来ない方も多く、それゆえ、地域コミュニティから孤立してしまう高齢者は少なくない。しかし、藤里町で出会った方にそのような人は一人もいなかった。私が3年間独居高齢者のお宅を訪問して気づいたことは、住民と社協の職員が非常に密接に関係しているということだ。だからこそ、住民は独居であろうが体が不自由であろうが「自分を気にかけてくれる人がいる。」「社協の人は自分を見捨てない。」と思っているのだと感じた。東京などの都市部ではこのようなことはないだろうと思う。この地域は本当に特殊なのだと感じているからこそ、藤里町に自分は魅力を感じた。魅力を感じるから、もっと知りたい。もっと住民の話を聴きたい。そう思えたことが、自分が3年間藤里町に通い続けられたエネルギーとなったと思う。

そして今年はお世話になった方々への恩返しと、自分の4年間の総仕上げを目的として訪問した。4年間藤里町に触れてきたことで、自分の社会福祉にかかわる見聞は大いに広まったと思う。特に藤里町は引きこもりの就労支援に関して非常に優れた先進事例を持っている。地域に存在する引きこもりの方を一人一人訪ね、実態調査をした経験が藤里町にはある。今までそれは文献で読んだり、社会福祉協議会の方々に聞いたことしかなかったが、今回の訪問では、引きこもりの経験があったが、現在では新しい仕事を見つけ、そば打ち体験の講師として地域の方々と交流活動をしている男性に出会うことが出来た。

また、冬季ではなく夏季に訪問したことで藤里町の違う一面を見つけることを一つの目的としたが、結局大きな変化は見られなかった。地域の方の活気も冬季に訪れた時と変わらなかった。しかし、そのことは藤里町の住民の方が豪雪にも負けず、たくましく生きているということだと感じた。

そして、自分は藤里町を訪問し続け、勉強を重ねることである結論にたどり着いた。

藤里町の住民がたくましく、豊かに生活できている理由はその気質と環境にあると思う。人口が少なく、高齢者が多いということがこの地域の特色ではあるが、その分社会福祉協議会の職員の日や福祉サービスが隅々まで行き届くということでもあると考える。東京などの都市部ではそう簡単にはいかないであろう。人口が多い都市部では福祉サービスや見守りが行き渡らないことが少なくなく、高齢者が地域コミュニティに参加できないことから孤独死なども多く、困窮世帯が社会福祉の目の届かないところに山ほど点在している。しかし、藤里町では上記の引きこもり対策の事業以来、孤独死などの事案はほとんど起こらないという。過疎地域なりの生活スタイルが定着し、隣近所の見守りこそが、町全体を成り立たせているという印象を受けた。

非常に興味深い事例や活動が藤里町にはあったが、このスタイルが都市部でも十分に活かすことが出来るかという、決してそうはいかないであろう。重複するが、社会福祉協議会の職員が、街の住民の家を一軒一軒訪ね、高齢者にとって心のよりどころとなっていることが藤里町の強みであり、過疎地域であるが故に人と人とのつながりが強固になった例であると思う。しかし、都市部では生活環境が違ってくる。集合住宅や団地が多い都市部では隣近所の関係性が比較的希薄であるとされている。そのような状況下での地域高齢者の見守り活動は難しいであろう。隣に住んでいる住民の生活環境を把握できていない付き合いでは、藤里町のような、住民同士が協力し合い、住みやすい環境を構築していくスタイルは確立してはいけないだろう。

大事なことは、先進事例を持つ地域から、ヒントをくみ取り、それを自らの住む地域に変換していくことである。人口が少ない地域、多い地域、それぞれの特色を生かした地域福祉を運営していくことが重要だと私は考える。例えば、東京などの都市部では学生を含む若者が数多く済んでいることが特色であると言える。彼らがもし、地域の高齢者の役に立

ボランティア活動を行うことが出来れば、それは地域の特色を生かした地域福祉を行えたと言えるであろう。地域を巻き込んだ活動はボランティアに留まらない。子育て世代の若い女性は同じような境遇の人たちと交流を望んでいるかもしれない、定年退職をして、やりがいを失った高齢者が新しい居場所を探しているかもしれない。このように、地域に潜在化するニーズを引出すことも地域福祉の役割と言える。

しかし、冒頭でもふれたように、社会福祉協議会などの相談援助機関は敷居が高いと感じる人が多いだろう。特に都市部に移り住んできた人などは、その地域にどのような社会資源があるのかを理解していない例が多々ある。これからの社会では、福祉ということをもっと普遍化していくことが課題であると思う。高齢化が進み、介護保険や社会保障が身近な存在となる日が近くなってくる。地域に住まう人々が、自分も地域福祉を担う一端なのだという意識を持つことが、よりよい地域活性化につながっていくと考える。

私は4年生となり、来年からは藤里町と関わる時間はほとんどなくなるだろう。しかし、この交流活動は後輩たちに受け継がれていくことと思う。我々の先輩方が藤里町を始めて訪問してから来年で10年になる。来年も、後輩たちが藤里町の住民の方と新しい関係を築き、それが末永く続いてくれることを願っている。10年間も我々学生たちを受け入れてくれた藤里町を方々に感謝すると共に、今後の自分の人生に学んだことをフィードバックしていきたいと思う。